

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1612

摩訶まかとは、大なりという心なり。大という心をしらんとならば、まずわが小さき心を尽くすべし。小心とは、妄想もうそう分別ぶんべつなり。
(一休)

△解説▽「摩訶」とはサンスクリット語「マハー」（大きい、偉大な）を発音で漢字に訳した言葉。「大」を求めたい。そのためにはどうすればよいのだろうか。とにかく自分のなかの小さな心のはたらき（とらわれの心であれこれ思念すること）を捨てていかななくてはならない。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.19 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1611

鳥は飛ばねばならぬ、人は生きねばならぬ。
(坂村貞民)

△解説▽混沌こんとんなこの世を生きなければならぬ。智慧ちえをもって進まなくてはならない。一寸先は闇ではなく、光がさす新しい朝をむかえることと知って、明けない夜はないと知って、あきらめないで進みたい。自ら暗闇をつくってはならない、生きるのをやめてはならない。ときには助けられ、ときには助けながら、私たちは生きていきたい。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.18 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1614

世間には世間のことから（法）がある。如来はそれを覺り、現觀げんくわんし、説明し、開示し、分析し、明白ならしめる。
(釈迦しゃか)

△解説▽無常なるものに、誤った関係をもちがゆえに矛盾が生じ、苦しみが生まれる。しかし、正しい関わりかたを知り、実践するならばのりこえることができる。世間は、苦しみを生む世界であるが、乗り越える道がある。それを「法を知ると」といつてもよいだろう。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.21 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1613

修行僧らよ、われは世間と争われない。しかし世間がわれと争う。法を知る人は、世間のなんぴとも争われない。
(釈迦しゃか)

△解説▽世間において誰かが論争をしかけてきたならどうするのか。論争しないというのは、自らが拠つて立つ確実な真理（法）があるから必要がなくなるのである。世間に無関心であるというのではなく、法を知って争うことなく、法を語り、法を説くのである。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.20 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 * No.1616

諸仏は悉く、一切は心より転ずと了知したもう、若し能く是の如く解らば、彼の人は真の仏を見たてまつらん。（『華嚴経』）

△解説▽すべてのものを心が転じたものと仏は知る。それを悟れば、真の仏を見ることになる。迷える凡夫も悟った仏も心のはたらきの違い。心はどんなものも作り出す。心が迷った状態なら苦しみがあるが、真実を見抜けば苦しみの克服へと向かう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.23 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 * No.1615

菩提心を発す人は多けれども退せずして実の道に入る人は少なし。都て凡夫の菩提心は多く悪縁にたぶらかされ、事にふれて移りやすき物なり。（日蓮）

△解説▽菩提（ざとり）を求めると心をおこす人、達成しようとする人は多いのだけれども、その心を継続させて退くことなく道を進める人は少ない。たぶらかされても、移ろいやすい心を励まして屈しない、不退転の力を身につけたい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.22 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 * No.1618

徳の頭に三重あるべし。先は其人、其の道を修するなりと知らるるなり。次には其の道を慕う者出来る。後には其の道を同行学し、同行するなり。（『正法眼蔵随聞記』）

△解説▽徳があらわれるには三段階ある。まずはその人がその道を修行していることが知られる。続いて、その人を慕う者がだんだん出てくる。そして、多くの人が集まって来て同じく学んで、共に修行するようになることである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.25 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 * No.1617

未だ念せず、念を欲し、念じ、念じ已る。（『摩訶止観』）

△解説▽心は形がなく見極めることがむずかしいが、四つの観察法がある。まだはたらいっていない心、心はたらこうとする状態、当に刺激にもとづいてはたらいっている心、すでに終わった心のはたらき。欲望に振り回されていた自分をこのように観察できれば、理想の状態も実現できるだろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.24 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1620

毎日自ら主人公と喚び、また自ら応諾す。
（『無門関』）

△解説▽ある禅僧は、毎日、自分に向かって「主人公、目を覚ましているか」と呼びかけて、自ら「はい、醒めていきます」と答え、「外の刺激、どうでもよいことに惑わされたり、自分を見失ったりしてはならないぞ」と言つては、「はいわかりました」と答えていたという。自分と対話して、自己を見失わず、真実に相応した自己を維持する実践である。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.27 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1619

実に自己は自分の主である。自己は自分の帰趨である。故に自分をとのえよ。商人が良い馬を調教するように。
（釈迦）

△解説▽自分こそが自分のよりどころである。教え（真理なる法）に照らし合わせて、ときには自分で自分を叱り、励まし、反省する。それが自己を護ることである。この実践を忘れずに保ち続けるなら、安らぎの境地へと達するのである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.26 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1622

衆生は顛倒して己に迷い物を逐う。
（『碧巖録』）

△解説▽人は何かを見たり聞いたりとすると、そのまま受け取って認識判断せず、そこに自分の勝手な解釈を加え変化させていく。たとえば、雨音がする、すると「また雨か、今日の予定をどうしよう」と不安で心を痛める。妄想である。顛倒とは、真理をまげた誤った想念、誤った見解をいう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.29 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1621

学問の道は他なし。其の放心を求むるのみ。
（『孟子』）

△解説▽学問の道は他でもない、自分の放心した本心を探求するだけのことだ。たとえば、世の人々は飼っている鳥や犬が行方不明になれば、熱心に探し求める。それなのに、最も大切なはずの自己の心がなくなつていても、放心状態にしておいて、求めようとしない。これは本末転倒ではないか。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.5.28 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1624

真理を見る立場にたつと、既成諸宗教のどれにもこだわらなくなる。どの宗教に属していてもよい。所詮は真理をみればよいのである。（中村元）

△解説▽真実の姿、真相をみて、苦しみの克服を目指すならば、目的となる場所の呼び名や道筋、つまり、宗教や宗派が異なっても大きな問題はなくなる。もちろん、違いが悪いのではない。違いは必要性から生まれた切り口の違いだから。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 5. 31 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1623

その道は「まっすぐな」と名づけられ、その方向は「危険なし」と名づけられ、その車は「ガタガタ音をたてぬ」と名づけられ、真理の車輪（法輪）を備えつけられている。（釈迦）

△解説▽さらにいう。「教え」は人を導くまっすぐな道であり、「法」を御者と呼び、「正しい見解」を先導者とする。このような車に乗って、道を進むのであれば、誰であつても安楽に近づくだらう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 5. 30 中村元記念館協力